

## 臨時一語の構造

林 四 郎

## 要 旨

私たちの言語生活の中では、通常の意味での単語のほかに、臨時に、その場限りでの一単語というものが生じている。特に新聞記事の中には、それが多く見られる。これを臨時一語と称し、どんな構造によってその結合が発生するかを考察し、文節と臨時一語との関係を考える。

## 一、長い単語

私たちは、一般常識として、国語辞書の見出し語になっているようなものを、日本語の単語だと思っている。そういう単語は、大部分が、漢字二字で書き表わされる程度のもので、決して長い形のものではない。これは、私たちの頭に観念的に登録されている単語のすがたを示すものである。しかし、実際の言語データによって語彙調査などしてみると、もっともっと長い単語が、世の中にたくさん存在していることに気づく。新聞は、それに気づかせてくれる何よりの資料である。

国立国語研究所が語彙調査をしたとき、最初にぶつかったのが、「単語とは何か。」という問題であった。文章を文節に切り、助詞や

助動詞を払い落したあとに残るものは、往々にして、国語辞書の見出し語のようなものではなく、「東独日本友好議員連盟会長」とか「参議院全国区制改革草案」といった漢字連続であることがめずらしくない。研究所では、こういう長い単語に「 $\alpha$ 単位」とか「長単位」とかの名称を与え、国語辞書の見出し語になっているような短い単語には「 $\beta$ 単位」とか「短単位」とかの名称を与えて、両者を区別した。短い単語が国語辞書的な単語なら、長い単語は現代用語辞典や社会科学辞典に見られる単語だと言える。前者は、日本語という言語体系の中に長く存在しつづける単語であるのに対して、後者は、その時その時の必要によって生れ、すぐに消えて行く単語である。この後者のようなものを、臨時一語と呼ぶことができよう。

## 二、臨時一語はどうしてできるか

臨時一語の発生事情を、世の中でそれが実際にできてしまう場合と、だれかが文章を制作する段階でできる場合とに分けることができる。その過程を次のようにたどってみよう。

## A 生活場面の中で発生する臨時一語

## 1 固有名詞化して

地名は、みんなが日常使う関係であろう、あまり長いものを見ないが、人名は、ずいぶん長いものができる。「じゅげむ」のごときものは論外としても、古事記に見える私たちの祖先の神の名には遠慮なく長いものがある。「天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命(アメニギシ、クニニギシ、アマツヒタカヒコ、ホノニニギノミコト)」だの「天津日高日子波限建鵜草葺不合命(アマツヒタカヒコ、ナギサタケ、ウガヤフキアヘズノミコト)」だの、とてもひと口で言える名ではない。人の名には、ほめことばや祈りや、出生の由来を語る物語やら、いろいろな情報内容を含み、いくらでも長くなる契機がある。

「文部省初等中等教育局高等学校教育課長」というような官職名は、純粹な固有名詞ではないが、普通名詞でもない。そして、構造的に長くならざるを得ない運命にある。

かつての伊勢湾台風や今年の長崎集中豪雨のような自然災害が起ると、NHKや新聞社に「……被災者救援対策本部」といったものが設置されて活動を始める。

こういったものの名称を広く固有名詞と考えれば、固有名詞は、常に新しい長い名前を生み出す生産の場であるということになる。

## 2 ことばの孤立用法によって

例えば、地下鉄東西線の大手町駅に、いくつもの出口があり、その丸の内方面の出口に表示をすると「地下鉄東西線大手町駅丸の内方面出口」となる。その地点を地図で示すときも、このようになる。話しことばや、小説のような文章活動の中では、こういう名詞連続は、あまり出て来ないが、表示板の中などでは、このようにな

りがちである。これは、書いている人に、この全体を一語とする意識はないのだが、文章活動のない物理的空間の中に、孤立的にことばを書いた結果、「地下鉄」「東西線」「大手町駅」「丸の内方面」出口」という五つの名詞が一箇所に集中して、見る人の目には長い臨時一語と見えることになったのである。水面上の泡が引き合って一箇所に集まり、やがて一つにもなるのと、どこか似ている。

### B 文章の中の特別な位置による臨時一語

次に、文章活動の中なのであるが、書きことばであるために紙面という空間をもち、視覚世界での特権を利用して、やや強引に一語のまとまりを作ってしまう場合がある。

#### 1 見出しの中で

新聞の見出しは、独特の文法で、いくつかの定型を作り出して来たが、その中の一つに、名詞化ということがある。名詞止めによる名詞句作りがもう一步進むと、テニヲハを省いた名詞作りになる。

包括的核実験禁止条約作り

米「参加の用意」と表明 国連軍縮委

という見出し(三・一二毎日)の第一句は、本文内では「これまで米国は、日本などが強く主張していた包括的核実験禁止の条約づくりに……との態度をとり」とある。格助詞の「の」が長い名詞の発生を妨げていたが、見出しの中では「の」の出番がなかった。

また、同じ日の同じ新聞に「4歳坊やお手柄通報」という見出しが見える。「お手柄通報」は、長いことばとはいえないが、臨時の結びつきできていることは明らかである。

ワンマン自認の働き者

調査にみる中小企業経営者像

は五月十一日朝日新聞の中の見出しである。「ワンマン自認の」は、「ワンマンを自認する」が普通の言い方であるものを、見出しゆえに「ワンマン自認」と名詞にし、「の」で連体修飾にすることになったものである。

## 2 紙面上の視覚性を利用して

「昨年七月九月期の実質成長は」とか「五十年一―三ヶ月期以来六年ぶりのマイナス成長」(二・二四読売)のように、音にならないハイフンを使うのは、目で見える紙面ゆえのことである。これらは、恐らく、声に出して読む場合にも「シチクガツキ」「イチサンガツキ」と読まれて臨時一語になっているだろうが、それは、一度、視覚上にこの形が成立したことによって可能になったので、もし、話しことばだけだったら、「七月から九月までの決算期」とか「第二・四半期」とかいうであろう。

■このお二人、「米モデルAフォード・クラブ」の会員で、同クラブ発案の「モデルAに乗って世界一周」ドライブに挑戦することになった。(三・二二六朝日)

は、専らカギ括弧に頼った文章で、あとの括弧、「モデルAに乗って世界一周」ドライブ——という書き方は、話しことばでは生かしようのない視覚性のものである。

## C 「文」の中に生ずる臨時一語

文章活動は、文法的にいう「文」の積み重ねでできる。そういう文(センテンス)の中に、絶えず臨時一語が生ずる。

### 1 できあがっている臨時一語が文の中に

その文が発話される前から、すでに世の中に長い単語ができていれば、それが文中にも現れるのは当然である。新聞記事は世の中の

事実を報道するから、委員会の名称やら事件・物件の名において長い単語が現れやすい。本稿で特に考えたのは、この種のものでなく、文の発話場面の中で初めて生ずる臨時一語についてである。それが次の項でいうものである。

## 2 構文上の技巧により

新聞記事という忙しい表現場面の中では、見出しだけでなく、本文の中にも、いくつかの要素を一つにまとめてしまいうまいかたが生じやすい。

■レーガン政権の政策をめぐる、中国内部でも、対米、対ソ政策の根本的見直し機運が高まっている。(三・二二六朝日)

右の傍線部は、ていねいにいえば「対米政策と対ソ政策とを根本的に見直そうとする機運」ということである。

以下、このようにして生ずる文中での臨時一語に限定して、その実態を見ていこう。資料の大部分は、昭和57年、2月と3月の新聞、朝日・毎日・読売の朝刊から取っている。

## 三、臨時一語を作る文法

新聞記事文章の中で生ずる臨時一語は、そのほとんどが名詞のかたまりになるものであるが、名詞のかたまりに、固いかたまりと、ルーズなかたまりとがある。

### A 固い名詞の臨時一語

#### 1 接尾性の造語要素による

漢語には接尾語用ものがたくさんあるが、普通の単語も随時接尾語となって、語を長くすることに働く。

■ワルシャワの街は、戒厳令施行当時にくらべ、兵士の姿もぐっと

減り……(二・二四読売)

■戒嚴令施行二か月余を経過したポーランドの表情は……(同右)

■「焼け石に水」程度の効果なら、もっと別の利用策があるのではないか……(三・二六朝日)

二番目の例など、よく考えると無理な言いかたで、「経過」に対しては「戒嚴令の施行から二か月余を経過した」とあるべきものである。

■ユダヤ至上主義の過激派(二・一八朝日)

■強い口調で「アラブ不信論」を繰り返し(同右)

■「至上主義」とか「不信論」とかの とばは、至上としたり不信したりする扱いの対象が必要だから、接尾的に働くことになってしまう。

■知事の口約「マイタウン東京」構想を進めている都が……(三・一二毎日)

■知事の「短期決戦」方針が、「流血の事態」を招く危険がある(二・一八朝日)

「マイタウン東京」や「短期決戦」は、それぞれ「構想」「方針」の内容で、間に「と」「という」のようなつなぎのことはを入れることができる。こういう「構想」「方針」などのことは「事情」「情勢」「見通し」などの語とともに、形式名詞「こと」に似た性格をもち、情報を加えるよりも、名詞のかたまりを作るための括りの働きを第一とするものである。

■共同開発といっても、商業化一步手前の実証炉の共同設計にとどまるが……(五・一一朝日)

の「一步手前」も、当然何かの一步手前でなければならないので接

尾語に帰することばである。「一步」は漢語、「手前」は和語だが、いっしょになって接尾語の働きをする。

和語では、動詞の連用形が上の名詞をかかえこんだまま名詞化の転成をする。「悪質タクシー違反隠し」(二・二四読売)の「隠し」は「タクシー違反」をだきこみ、それに「悪質」が接頭的についている。「損益勘定扱い」(三・二六朝日)、「ワシントンもうではしない」というドゴール主義の伝統」(三・一二毎日)、「都民の都バス離れにストップをかけるため」(三・一二毎日)等の例に見える「扱い」「もうで」「離れ」は「……と扱う」「……にもうでる」「……を離れる」を名詞化している。和語動詞のこういう現象は、今さら臨時一語というのおおかしいようなもので、「国生み」「国引き」「都うつり」「廓通い」「度胸だめし」というように、大昔から日本人の言語生活に親しまれて来た言いかたであり、これは今後とも造語力を失わないと考えられる。

## 2 接頭性の造語要素による

■渋谷にうるおい遊歩道(二・二四読売)

■「消防計画書」と大違いのお粗末体制(同右)

ともに見出しの文句であるが、「うるおい遊歩道」は実際にそう名づけられているものだから、記事以前の臨時一語、「お粗末体制」は「お粗末な体制」でも同じであるものを芝居がかって調子づけた紙面上の言いかたで、「こ存じ旗本退屈男」というのと同じ行きかたである。

漢語の接頭語は、また、数が多いが、その中に、「対潜警戒機」の「対」のように、それが「潜(＝潜水艦)」に対して接頭語となるだけでなく「潜水艦を相手に警戒する飛行機」ということで、さ

らに下の「哨戒」にかぶさって、結局二つの要素を支配することになる接頭語があることに注意したい。

■未利用地も約二千万平方メートルに達している。(三・二六朝日)  
 ■個人可処分所得が二年連続マイナスとなった……(三・一二毎日)  
 「未」は「利用」をかかえて「地」にかかり、「可」は「処分」をかかえて「所得」にかかる。これらは、多分、紙面上で記者が作った臨時一語ではなく、官庁統計に使われていることばを、そのまま紙面に使ったものであろう。

### 3 造語要素の構文的結合による

漢語は、長く連ねてひとかたまりにできるところに特徴があり、それが日本語の単語を長くする元凶であることは、だれでも知っている。官職名や事件名が長くなるのは、それらが漢語で構成されるからである。

そこで漢語のつながりかたの文法を明らかにしなければならないが、これは、大体において、紙面の文章活動以前の問題であり、また漢語語構成の一般の問題である。大事な研究課題ではあるが、ここでは、考察の対象外とする。ただ、記事文章の作文段階でも、もちろん、漢語同士の結合力は発揮される。

■二十六日英国政府は、二十五日の同島グリトビケン港制圧に続いて、もうひとつの要港リースも占領したと発表した。(四・二七朝日)

の「同島グリトビケン港制圧」のような縮約表現は、作文の過程で現れるものである。

### B ルーズな名詞の臨時一語

かたまりが名詞的なものであることは確かでも、どこからそのか

たまりが始まるのか、一見明らかでないものがある。

### 1 「の」を含む文節をかえこむ

■社会党が五十七年度予算案の組み替え要求案をまとめたほか……

(二・二四読売)

「要求」に案がついていなければ、「五十七年度予算案の／組み替え要求」で、多少長い二文節ということになるが、この全体を「案」が包むために、「五十七年度」から「要求案」まで一続きの臨時一語となる。

■日本石油が石油輸出国機構(OPEC)の決定待ちの姿勢で臨んでいたため……(三・二六朝日)

日本石油がOPECの決定を待つのであってOPECが待つのではないから「石油輸出国機構の決定待ち」をひとかたまりとしなければならぬ。

■ブレジネフ・ソ連書記長が二十四日タシケントで行った対中和解の呼びかけは、欧州戦域核の一方的凍結演説に続いて、ソ連がこの一週間、積極的に打ち出した「平和攻勢」の動である。(三・二六朝日)

「欧州戦域核の一方的凍結」を内容とする演説だから「欧州」から「演説」までが分けがたい一連続となる。

■遠い異国で、さびしい晩年を送っている日本国籍の老人対策については、先年、国会でも問題にされたことがある。(三・二六朝日)

この「対策」は、一般的「老人対策」ではないし、「日本国籍の老人対策」でもない。どうしても「遠い異国」から問題は始まるので、傍線部全体のような妙な臨時一語となるわけである。この文章

を書いている人は、まさかそういう構造になっているとは思うまいが、理屈の上からは、こういうことになる。「……老人に対する対策」と、「に対する」が入ってれば、この問題は起らないのだが。

■F4ファントム戦闘機の爆撃装置改修費問題で衆院予算委の審議が空転したため……(二・一八朝日)

■シナイ半島の返還反対運動の拠点となっているシナイ半島・ヤミット地区(同右)

■この地区の給水パイプの撤去工事が始まった時には……(同右)

■将来は農産物の加工工場を造る計画もあった。(同右)

■機関誌を若者好みの情報誌ふうに作り替えるなど、工夫をこらして……(三・二六朝日)

■高速道路の走行中にクラシクシャフトが折れた。(四・二七朝日)

■米国内にもワシントンのアジア政策上、いまの日韓関係は放置できない段階に近づいているという認識が高まっている。(五・四毎日)

■東京消防庁側は、「昨年の川治プリンスホテル火災以後、都内のホテル、旅館など……を査察(二・二四読売)

ここに示した八例を一読した読者は、恐らく、これらがどうして臨時一語の例なのかと、ふしぎに思われるだろう。それほど、文節関係は、一見、自然に見える。しかし、よく見ると、これらにおいて

は、

(F4ファントム戦闘機の爆撃装置改修)費)問題

(シナイ半島の返還)反対)運動

(給水パイプの撤去)工事

(農産物の加工)工場

(若者好みの情報誌)ふう

(高速道路の走行)中

(ワシントンのアジア政策)上

(「昨年の川治プリンスホテル火災」以後

という関係が生じている。傍線部の最後に位置する接尾性の名詞は自分の属する文節内の名詞にだけついているのではなく、一つ上の、「の」を含む文節からの流れを受けて、「」で括ったかたまりの全体についているのである。

2 「の」以外の形の文節をかかえこむ

「の」を含む文節をめぐる、こういう事情が生じやすいことは明らかなのだが、それ以外の場合でも、同様のことは生ずる。

■共産党を除く野党統一要求案として(二・二四読売)

「共産党を除く」は「野党」にかかるが、その「野党」が「野党統一要求案」にのみこまれるから、「共産党を除く野党統一要求案」がひとつづきになってしまう。

■卒業に必要な単位取得に予定を上回る日数がかかり、……(三・二六朝日)

「単位取得」が卒業に必要なだというのではなく、「卒業に必要な単位」を取得することを問題にしている。

■安くても、ちょっといい霧田気作りが好まれるんでしょね。(同右)

「霧田気作り」が「ちょっといい」のではなく、「ちょっといい霧田気」を作ること論じているのだ。

3 並びの構造による

二つ以上の要素が並んでいて、最後の要素にだけ別の要素がつ

き。内容的には、前の要素にもついているという場合である。

■従業員に対する初期消火や避難誘導訓練が不徹底だったこと（二・二四読売）

「訓練」は「初期消火」にもついている。「初期消火訓練や避難誘導訓練」と繰り返すか、「初期消火や避難誘導の訓練」と「の」を入れるかすれば、不安定な臨時一語は発生しないのである。

■大半は線路、鉄道林、駅用地など して使われてゐるが（三・二六朝日）

この「用地」も「線路用地」「鉄道林用地」、そして「駅用地」であらう。

また、並べたあとに「とも」をそえて括るときにも、離せな感じが出て来る。

■さらに、卸売物価、消費者物価とも、一段と落ち着きを増した。

（二・二四読売）

■名目成長は、四―六月期、七―九月期とも、一段と落ち着きを増した。（同右）

#### 4 用言の性質をとどめた名詞

漢語には、無活用動詞といわれるものがあり、形は名詞でも、意味内容は動詞だというのが少なくない。

■一方では、赤字縮小が国家的課題とされる時期にかかり、遠い将来の土地活用より当面の収入増を優先させる傾向が強まった。

（三・二六朝日）

「縮小」「活用」「増」は、いずれも動詞性の漢語で、「赤字を縮小すること」「土地を活用すること」「収入をふやすこと」と、動詞の働く名詞句を作っている。

■都心を 核燃料輸送

市民グループが抗議行動

これは、三月十二日毎日新聞の見出しから取った。上に「都心」があるため、「核燃料を輸送」という構造にならず、「核燃料輸送」を一つの動詞として働かせることになった。

■石油業界最大手の日本石油は……（三・二六朝日）

「最大手」の「大手」は和語で、名詞というよりは形容動詞と見るべきだろう。その性質がそのままひろがって「石油業界最大手」という形容動詞ができている。

紙面上での作文の段階でできて来る臨時一語のできたを、大体、以上のように観察した。

#### 四、構文活動中になされる単語操作の二方向

文を作る活動は、ことばで考えを固めながら、固めたものを構造化して組み立てて行くことであるが、固めるときに、なるべく大きな固まりを作って、それをなるべく単純な構造に入れて組み立てようとするやりかたと、固まりを小さくし、小さな固まりを、末端まで文法規則で運用しながら、網の目のように構造化して行こうとするやりかたと、二つの方向があるように思う。

臨時一語は、大きな固まりを作ろうとする結果、現れるものである。さきの例で、「対米、対ソ対策の根本の見直し機運」という臨時一語を、ていねいにいえば「対米政策と対ソ政策とを根本的に見直そうとする機運」となると言ったのは、このことである。「対米政策」とか「対ソ政策」というのも、すでに臨時一語だから、もっとていねいにくだけば、「アメリカに対する政策とソ連に対する

政策」あるいは「アメリカとソ連に対する政策」となるから、全体では「アメリカとソ連に対する政策を根本から見直そうとする機運」のような言いかたになる。こういう言いかたをすれば、「アメリカとソ連に／対する／政策を／根本から／見直そうと／する／機運」という文節構成になり、どの文節にも、短い通常の単語しか入っていないこととなる。これが、小さな固まりを、末端まで文法規則で運用しながら、きめ細かく文を構成するやりかたである。

コンピュータで言語処理をする場合に、末端現象の処理まで全部自分のプログラムで判断し、処理して行く方式と、自分のプログラムによる処理は大筋の段階にとどめ、細かい末端処理を、なるべく既成のルーチンや、予め用意したテーブルの参照で済まして行く方式と、二つの流れがあるようである。建築にたとえれば、前者は、基本設計から室内部品の取り付けまで、全部、手工業的に、自分で納得できるように造って行くやりかた、後者は、基本設計と親骨だけを自分の考えで組み、あとはなるべく既成部品のはめ込みや取り付けで片づけるやりかたである。生産の方法が工業化し、大量生産で処理するようになれば、どうしても、部品はめ込み主義になって行く。

作文のしかたにも、これと同じことがあるように思える。長い臨時一語を作って名詞的なたたまりを大きくし、それを運用する文法は、なるべく簡単なルールですまそうとする志向が、大量生産的な文章では、多く働くのではあるまいか。その結果、新聞の文章に、臨時一語が多く生れることになるのだからと思う。

新聞の記事に、文章のきめ細かさなどは必要でない。早く、たくさんさんの情報を流してくれることを、私たちは、新聞に期待している

のだから、臨時一語の構造に多少無理なところがあるうと、意味がわかりさえすれば、いいのだし、それが一目見て早くとらえられれば、なおいいのである。そうすると、どうしても、漢字をたくさん使って、手っ取り早く意味を合成し、各要素の間の論理関係は深く追究しないというタイプの文章ができて来る。現代新聞と臨時一語との深い縁が、こうして保たれるのである。

臨時一語を多用する文章の反対は、一文節の中に自立語の短い要素が一つだけあるようにできている文章である。小学校の国語の教科書に出ているような文章は、たいてい、そういう形になっている。例えば、次のようなものである。文節分かち書きを示す。

■ 一度、上野動物園で、こんなことがあった。夕方、観客が帰った後、園内見回りの夜けいが、犬を連れて歩いてきた。カンガルーのさくの前まで来ると、今までおとなしくしていたカンガルーが、急にさくを とびこえてにげた。

どこの動物園でも、カンガルーのいる所のさくの高さは、二メートルしかない。これだけあれば、にげないのだ。ところが、この場合、カンガルーは、とつぜん、大敵である犬を発見した。自分は、三メートル以上ジャンプできるから、犬も、二メートルのさくをこえて、自分をおそって来るかもしれない。しかも、さくの中は、せまい。今のうちにさくの外にとび出してにげないと命があぶないかと考えてにげだしたのである。『新しい国語』5上「動物の能力」より

この中で、臨時一語と見られるつながりは、「園内見回り」と「三



メートル以上」の二つしかない。あと、強いて言えば「上野動物園」があるが、これはあまりに耳に親しいから、だれも臨時的結合とは感じない。「三メートル以上」のような数量表現は、これもあまりに日常的なもので、臨時の感じがしない。「園内見回りの夜けい」は、確かに「園内を見回る夜けい」と言っているところだが、ここは、それよりも「園内見回りの」の方が、毎日きまって見回っているという職業的行動をよく表している。こういう表現効果上の理由があつて、ごく短い臨時一語が使われているほか、あとは、どの文節にも、普通の意味での単語しか使われていない。こういうのが、やや古いタイプの、きめ細かい日本文文なのである。

### 五、文節という単位の意味

ここで、私は、日本語という言語が、実に、文節という単位で、よく支えられていることに思い至るのである。文節という名称は、橋本進吉氏によって与えられ、橋本文法による構文解析は、まず、文を文節に分けることから始まるわけであるが、文節とほとんど同じ単位を、神保格氏は『言語学概論』（大正一一年）において「句」という名称でとらえている。

文節でも句でも、名前はどちらでもよい。とにかく、一つの意味のかたまりとテニヲハとによって構成される発音上の小さなひとまとまりが、日本語を不死身のものにしてるように思うのだ。文節の特徴を、次のようにとらえたい。

- (1) 意味の上での複雑な構造を音声形式の上で極めて単純にする。

たとえば、文節は、忍者の使う竹筒のくさりのようなもの

で、各ユニットがほぼ等分の長さを持ち、一つ一つにすれば、まとにばらばらなもので、どれも同じようで、少しも特色がないように見えるが、中のひもをぎゅっと引いて全体に血が通うと、たちまち生きて如意棒となり、所期の目的を果すのである。

文には、もちろん、立体的構造がある。それを、山田文法、橋本文法、松下文法のどれで解いてもよい。また、生成文法的木の枝構造でも、ディペンデンス・グラマーでも、IC分析でも、いろいろ好きなやりかたで解くことができる。私にいちばん説得力があるのは、時枝文法の入れ子型構造である。

橋本連文節と時枝入れ子構造との根本的なちがいは、連文節論では、文の要素がどんなに大きくまとまって行つても、結局は、文節同士の結びつきと見るのに対し、入れ子型構造では、構文論理としては文節は解消され、その段階までの詞のまとまりとテニヲハとの関係としてとらえられることである。

言語において、発音と意味とは、関係がありながら、一応関係なくとらえられる二つの要素である。日本文の意味の構造は、確かに入れ子型に構成されるが、発音は、絶対に、文節で支えられる。私たちは、日本語の文を聞いた話したり、読んだり書いたりしているとき、頭の中では、入れ子型の構造を作って、意味の世界を作っているが、その「見え」や「聞こえ」の形は、あくまでも、文節になっているのである。頭の中で重層構造になっている言語を、見えや聞こえの外形において単層化し、単純化して扱わせるのが文節である。

- (2) 構文上次元のちがう単語を、同じ扱いで発話させる。

例えば「世界的に有名な人物」というとき、発音は、「世界的に

有名な「人物」と、文節に従ってなされるが、意味の上では、有名さ加減が世界的だととらえられるから、「な」は「世界的に有名」についている。「有名」だけについているのではない。「に」は「世界的」にだけついていて、「世界的に」が「有名」の中に注ぎ込まれたあとでは、独立した存在ではなく、「有名」の一部を分担する要素となる。しかし、発音の上では、そんな、含み含まれる関係には関係なく、「世界的に」と「有名な」とが、同じ形、同じ重さで発音される。「たばこを買いに行く」という形をとりあげて、「たばこを買う」という動詞句をそのまま「たばこを買い」と名詞句にしたものに「に」がついて「行く」という行動の目的にすえているのだという解釈を示されたのは時枝氏であった。これには全く反論できない。その通りである。しかし、発音は「たばこを 買いに行 く」なのである。

(3) 語順のルーズさを保障する

日本語が語順に寛大な言語であることは、世界的に定評のあるところである。これは、文節というユニットに、かなりの独立性があるからだろう。音の組織と意味の組織とが別の原理をもっているために、文節内の詞と辞の順序さえくずれなければ、文節の順序は、ある程度入れかわっても、頭の中で、自由に組み替えて論理構造を作りなおしてしまうのではあるまいか。忍者の竹筒は、硬軟は自在でも、筒の順序を変えることはできない。順序に自由度のある、日本語の文節構造は、その点竹筒以上に便利である。

(4) 臨時一語の中でも文節の切れ目をゆるす

さきに、臨時一語が「の」を含む文節をかかえこむ場合について述べた。あれは、意味の構造から考えて、二文節以上のつながりが

臨時一語になることを指摘したのであるが、だからといって、そういう文章を発話するときに、臨時一語をひとつづきに発音しなければいけないわけではない。例えば「老人対策」の文でいえば、それを、

遠い 異国で、さびしい 晩年を 送って いる 日本国籍の 老人対策に ついては、……

と、文節通りに切って発音して、いっこうにさしつかえないのである。

(5) 長い漢語の間にも、ポーズを入れて発音することをゆるす。

前項で述べたことは、さらにエスカレートして、もっと固く結びついている臨時一語の間にポーズが入ることも決して拒否しない現象を見るに至る。例えば、

■海外炭急騰で原発優先

冷めた 石炭熱 電力業界

という見出しがある(二・一八読売)。「海外炭急騰」も「原発優先」も、文句なしの臨時一語だが、これを、

海外炭 急騰で 原発 優先。

と切って発音して、何もおかしくない。さきにあげた例の中の「二十五日の同島グリトビケン港制圧に続いて」という文句なども、確かに「同島グリトビケン港制圧」が臨時一語になってはいるが、これを切り離して

二十五日の 同島 グリトビケン港 制圧に 続いて……

と発音しても、決して不自然ではないのである。

ここに、臨時一語の臨時一語たるゆえんがある。臨時一語は、元

来が、その時限りの寄り合いであるから、長くなってひと口に言いにくければ、言いやすいように、単語らしい切れ目のところにポーズを入れてさしつかえないのである。これによって意味の構造には何の変化も起りはしない。

文節は、以上のように、あくまでも、発音上の単位であり、それが意味構造を支配しないことよって、日本語の自由さを保障しているのである。

## 六、単語の恒久性と臨時性

単語とは何かと考えると、だれにとっても定義はむずかしくなってくるが、定義できるにしろ、できないにしろ、言語の運用は単語から始まる。単語を連ねることなしに言語表現をすることはできない。

私たちが、国語辞書を、単語を集めたものだと思っているのは、ひとつの意味のかたまりと、ひとつながりの音形との対応が、一つの言語社会に固定していると信じているからである。それが固定していないのだったら、そんな単語を頭に入れても、役に立たないことになる。社会に固定しているものを、自分だけが知らないのでは、社会生活について行けないから、辞書にのっている単語は知っていないなければならないと思うのである。

しかし、その固定には、度合いというものがある。広い空間と長い時間とにわたって固定しているものほど、固定の度が高いわけである。狭い空間でしか固定していないものは方言であり、短い時間の間しか固定していないものは、特定の時代語である。

音の長さからいうと、意味をにないうる最短の音形は一音節であ

らう。母音を含まぬ一音素では意味をになうことができない。一音節は「葉」とか「血」とか、意味をになうことができるが、日本語の音節のように形が単純では、意味をになうのに最適な形ではありえず、一語としての落ち着きに欠けるところがある。二音節、三音節となつて、音形と意味との対応の固定度が最も高くなる。中国語の単語の基本性格が単音節であるのは、一音節の音形が日本語の一音節とは比べものにならず長くて、バラエティに富み、それが声調によって一層豊富になつていからである。

日本語のいわゆる単純語は、「やま」「かわ」「はな」「なべ」や「くるま」「ちから」「ひかり」のように、たいていが二音節か三音節でできている。こういうものは、意味のにないかたの最も簡素な形であるから、言語学用語で「モルフィーム(形態素)」とも呼ばれる。「遠い」「近い」の「と」お「ちか」とか、「静か」「やわらか」の「しず」「やわ」のように、独立性は弱くても、最短の形式で意味をになうものも、モルフィームとされる。このような単純語やモルフィームは、意味と音形との対応の固定度が最も高いもので、日本人の間に日本語がある限り、まず変らないだろうと思われるものである。すなわち、単語として最も恒久性をもつものである。

単純語から複合語ができる。複合語も、「たにそこ(谷底)」「すなはま(砂浜)」「わかもの(若者)」「としより(年寄)」のようなものは固定度が高く、一つの単語として落ちついた存在になっているが、「若年寄」という結合は、徳川幕府の一役職名しか表わさないし、「鍋底景気」といえば、昭和のある時期の経済状態しか表わさない。大体において、単語の複合の度合が高くなるほど、意味と音形の対応の固定度は低くなって、次第に国語辞書とは縁がうすく

なっていく。それとともに、長い単語が現代用語辞典や、各専門方面の辞典の世界のものとなる。「一億総ざんげ」「一億総白痴化」「三百海里時代」「しらけ世代」といったことは、世相史の一時期にしか席のないことばである。こういうことばが、生活場面の中にできる臨時一語であり、これらよりも、さらに臨時的で、作文されたその一つの文章の中でしか一語性を保たない、はかない臨時一語が、本稿で問題にしたものである。

生活場面の中に生ずる臨時一語として最初に言及した人名等の固有名詞は、また、一個特別の位置にある。それらは、できかたは臨時的であったが、ひとたびできると、特定の一箇の存在にこびりつくので、そのものの存在の代理として、時には民族とともに生き伸びて、極めて安定した恒久性をもつことになる。「ニニギノミコト」や「ウガヤフキアヘズノミコト」は、その位置に達したものである。